

∧教化学研究レポート∨

## 『歎異抄』と登校拒否症

——人間主体の自覚の立場から——

田代俊孝

- 一、はじめに——教化学について——
- 二、登校拒否症の概念とその実態
- 三、自覚的精神療法
- 四、宗教的自覚と登校拒否症
- 五、『歎異抄』における自覚
- 六、事例
- 七、むすび

一、はじめに——教化学について——

仏教とは、解脱、救済を目的とするものであるから本来、実践的なものである。それゆえ、その教理体系、もしくは、その救済の道理を〈学〉として、客観的に見て行くことと同時に、主体的な実践学としての立場でも研究さ

れねばならない。

今日、その実践学的範疇を教化学と呼んでいる。しかし、現実には教理学が先行し、教化学は、それほど研究が進んでいない。仏教学は、教理研究から実践的研究へ展開されて、初めてその本来的意義をもつものである。

従来、教化学といえは、ともすると教導法、もしくは、布教に伴う具体的な技法論として、とらえられていた。しかし、それも大切な問題ではあるがそれが教化学の本質を成すものでないことは、いうまでもない。

また、一般に「教化」というと、その字義的解釈より、人が人に教える教化√と解されるが、それが無明なる衆生にとって、成就しがたきことであることは、自明のことである。

ことに、真宗教化においては、十七、十八の二願の対比、あるいは、真宗教化を具体的に示すとされる「自信教入信」(善導)の領解からすれば、人が仏に入学ぶ教化√と解される<sup>(1)</sup>。

つまり、教化とは、どこまでも仏に自らの生き方を聞き学ぶということを意味するものにほかならない。そのことが結果的に他を教え信ぜしめるのである。

さて、教化学を以上のように実践仏教学としての意味で領解すれば、我々が持つ種々の苦悩を仏教を学ぶことによって越えていこうとするとき、そのこと自体、すでに教化学であるといえる。現代社会の種々の問題が仏教の立場で考えられるならば、それは、すべて入教化学√の対象となる。

たとえば、靖国神社問題が、法律論や、政治問題として考えられるならば、それは法律学や政治学の一つの問題である。しかし、そのことが自己の生き方、自己の信心の純、不純、あるいは、自己の神祇的信仰に対する迷いと

いったレベルで考えられるのであれば、それは明らかに教化学（仏教学）の一つの課題である。

このように日常の諸問題が宗教的な歩みの中で考えられるのならば、それらはすべて、教化学の対象となりうるのである。

以上のような認識のもとで、筆者は、近来、登校拒否児の問題ととりくみ、仏教の立場で研究、実践している中で、ここでは、そのことを研究レポートという形で報告してみたい。

具体的には、自己を見失い、登校拒否症に陥った少年たちとの出会いの中で、さらに、共に学んできた中で、彼らが『歎異抄』（仏教）をとおしていかに、人間性を回復していったかという点で考察する。

とりわけ、A少年（十八才）の場合は、高校二年の時に登校を拒否し、一年半にわたり、筆者の自坊（真宗大谷派行順寺）で『歎異抄』を学習し、その後、自ら志願して、大谷専修学院へ行き、今は自宅にて、家業を手伝いながら、主体的な生き方をしている。

しかも、そのA少年が、今度は同じ苦しみをもつB少年の相談相手となり、主体的な自覚に基づく生き方を勧めている。

この点について、十分な分析と論理的裏付けをしなければならないが、今回は、A少年が『歎異抄』に出遇った後、苦しい時代をふり返って自らの歩みを告白しているので、そのことを、資料として、報告し、若干の考察を加えるに留めたい。

## 二、登校拒否の概念とその実態

登校拒否症は、今や報告のたびに数を増し、種々の関連現象をひきおこし、大きな社会問題となっている。それゆえ、あらゆる方面からその研究がなされなければならない。

『教育白書』などに、登校拒否が初めて報告されたのは、昭和二十八年（一九五三）年ごろからであるが、特に昭和三十五年以後は急増の一端をたどっており、今やどのクラスにも一人や二人はいるという状態になっている。しかも、それは、大都市のみならず、地方の山村でも同じように増えている。

すでに、多くの学者が指摘するように、それは、高度経済成長のグラフの延長線上にあり、家庭の経済的潤いによる教育過熱といわれる状態と無関係ではない。

また、幼児期から、知的教育を志向し、それを強引に押し進める知性偏重の育児態度も一因と思われる。ところで、登校拒否の概念として、一般に次のように言われている。

「親たちが熱心に登校してほしいと望んでいるにもかかわらず、子供はそれを拒否する状態であり、その際、親子の会話や子どもの行動から精神病を否定できる場合」<sup>(2)</sup>

つまり、何ら直接的原因がなくて、登校を拒否する状態である。もちろん本人も登校したいと思い、前日には準備をするが、当日の朝になると体がついていかない。かといって、精神的な異常は、まったく見られない状態である。むしろ、比較的「よい子」といわれ、母親の言うことをよく聞き、成績の良い子がこのようになる。

原因としては、前にも述べたように直接的なものは見当らない。しかし、そのような状態を生み出した原因は、親の過干渉、過保護にあると思われる。

過干渉とは、親自身が「よい子」という理想の子ども像をもち、そのワクの中にはまった子供にしつけようとして干渉しすぎることである。親が、自らの我執でもって、子に対し、所有意識をもち、子を育てるのではなく子供の人間性を無視し、親にとって都合のよい子どもに作りあげて行くという思いに立つものである。「よい子」と思われていた子どもが突然、登校拒否になるのも、このようなことによるのである。

過保護とは、いわゆる「まかせる」ことができなくて、だいじにしすぎることである。

したがって、このような子どもは、自主性の発達が著しく遅れ、依頼心が強い。このように、親の、子に対する執着、あるいはとらわれ、分別心による養育態度に大きな原因があることが考えられる。

そして、その経過は、平井信義氏によれば、概ね次のごとき状態をたどる。<sup>(3)</sup> (要約筆者)

### 1 初期の状態

体の異常を訴える。軽微の症状を誇大に訴える場合と、心身症の場合とがある。いずれも登校したくない気持ちが根底にある。

## 2 暴力の時期(家庭内暴力)

### (1) 身体的攻撃

### (2) 器物破壊

(3) いやがらせ

### 3 怠情な時期

昼と夜の逆転した生活、起床は午後になり、夕方の四時、さらに夜八時になる例もある。すなわち、日中は布団の中にいて、夜中は起きている生活になり、就寝は明け方である。

暴力が続いている子供では、それが夜間に及ぶこともあり、両親は睡眠のできない状態になることさえある。特に親の枕元で巨額な金銭や高価な物質を要求し、親を寝かせない。十万円寄せとかオートバイを買えと行って迫り、中には包丁などを突きつける子供もいる。

### 4 回復期

以上の平井氏の経過、分析は、筆者といっしょに学んだ二少年の場合においてもまったく同じであった。

さて、このような登校拒否児に対して、今までにいくつかの実験的試みがあった。たとえば、戸塚宏氏のスパルタ訓練によるヨットスクール、高橋牧師によるデンマーク牧場、青田強氏の日生学園などの例がある。しかし、未だ完全な解決策とはならず、問題を残している。

スパルタ訓練が苦悩をもつ少年にとって、その心をますます閉ざす方向であることはいうまでもない。むしろ、逆に、心を開かせ、解放させる方向で考えねばならない。

仏教は、あらゆる人々の心を解放（解脱）し、自在なる世界を与える。それ故、この問題についても宗教的自覚（人間主体の確立）による道が考えられるのである。

もとより、それは、名古屋大学名誉教授の岸本鎌一氏（精神医学）が、自覚的精神療法として提唱しているものと基本的に同じ考え方である。それゆえ、次に岸本氏の自覚的精神療法について一瞥してみたい。

### 三、自覚的精神療法

宗教とは、本来、人間主体を回復するものである。それゆえ、それを精神医学に応用し、適応を失った者に対し、人間主体の確立を促すことにおいて人間性を回復させようとする療法がある。岸本鎌一氏の自覚的精神療法がそれである。

しかし、この療法は、精神的に適応を欠いた者に対するということよりも、むしろ、ある意味では、すべての人間が人間性を失っているわけであるから、すべての人に対し、なされるものである。その意味では、それはまったく宗教活動そのものであるといってもよい。ただ、氏の場合、たまたま適応を欠いた者に対して行っているにすぎず、また、宗教に限らず文学や芸術の立場からも行っている。

この療法について、氏は次のように述べる。

「神経症や精神病の治療にあたって、勿論普通行なわれております身体療法や、心理療法や、また社会療法によって、家庭、学校、社会の調整をはかりますが、それだけでは充分ではないのです。どうしても精神療法に必要なのです。昔は、専らこれは宗教家のする役目でございます<sup>(4)</sup>。現代ヨーロッパにおいても実存哲学に基づいた人間学的精神療法というものが提唱されております。」

そして、その方法について、

「患者さんの最も親和性のあるものを患者自身に選んでもらうことにしております。その中心は精神的主体性の世界の自覚を目的としているのです。文化としての宗教、道徳、芸術などをその方法として用いています。<sup>(5)</sup>」  
と、述べ、その実際法として、

「宗教の場合では、先ず自分の最も親しみのある經典や語録を百回読み、その中で自分の最も心を打った章句を毛筆で百回書いてもらっています。

それは、(1)頭でわかる(知的理解)、(2)胸でわかる(情的把握)、(3)肝でわかる(意的遂行)、(4)手足でわかる(行為達成)、(5)最後に全身でわかる(体得)という方向をとることをねらっているのです。

患者は最初は經典なり語録を前においてそれ(it, Es)として見えています。何分患者は万根錯節した自己のコンプレックスに悩んでいます。これはある点では精神的自覚めの準備ができていと言えるのですから、そのうち經典なり語録の背後にあるものを、汝(thou, Du)として把握し、体得するようになるものです。

マルチン・ブーバーの言いますように、私—それ(Ich—Es)から、私—汝(Ich—Du)の關係に転じます。

そして絶対者にじかに対面します。親鸞聖人の三願転入にその過程が明快に示されていると思うのです。しかし、宗教の教義なり、教理なりを、また哲学の實在的論理を、文学のアイロニー的真理を、真に体験するのはなかなか困難です。それがためには長年月の手厳しい体験を幾度かくり返すことによって初めて可能<sup>(6)</sup>です。」  
と、述べる。



すなわち、自覚的精神療法とは、普遍真理による人間主体の確立そのものであるということができる。したがって、その自覚とは、宗教的自覚のことであり、それゆえ氏は仏陀や親鸞、あるいは宗教人の「解脱」そのものを臨床例として示すのである。

本来、人が正常であるとか異常であるというのは単に、人間心に基づく見方の価値基準で決めているわけであり、普遍真理の前には正常も異常もない。氏によれば、むしろ、異常者といわれる人こそ、それを逆縁として、主体的世界に帰する場合が多いという。

以上、自覚的精神療法について、見て来た登校拒否症は、精神病ではない。しかし、精神的苦悩から自己を見失い、自我意識に縛られている状態である。それゆえ、岸本氏の所説同様、宗教的自覚によって、人間性を回復して行くことができると考えられる。次にそのことを述べてみたい。

#### 四、宗教的自覚と登校拒否症

登校拒否症の少年は、家庭の中で、大事に扱われて育っているのと、学校の成績が比較的良いということもあって、プライドが高い。そこに極端な精神的もろさがある。

同時に、両親、特に母親より「よい子」というイメージの「理想の子ども像」になるべく日夜、訓育されているわけであるから、本人として、それに応えるべく必死に努力している。つまり、母親自身の価値観（人間的尺度）による価値基準（ワック）が押しつけられ、人間性がまったく失われて行く。それは、エゴに基づく世間的価値基準への

とらわれによるものである。

仏教では、そのようなとらわれや思い、分別心に縛られていることを「繫縛」とか「具縛」ということばで表現する。仏教の「解脱」とは、それからの解放である。

それゆえ、宗教的自覚によって、人間主体を回復することこそ、そのワクをこえる道である。このことは登校拒否児に限らず、われわれとて同じである。

親鸞のことばでいうならば、

「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもて、そらごとたわごとまことあることなきに、

ただ念仏のみぞまことにておはします」<sup>(7)</sup>（『歎異抄』）

とか、

「善悪のふたつ惣じてもて在知せざるなり」<sup>(8)</sup>（『同』）

という立場である。

これらのことばは、矛盾に満ちた人間心に基づく価値観を否定し、自己を越えた宗教的真理に帰することによって、あらゆる価値をこえた世界に立たしめんとするものである。それゆえこのことばは少年たちにとっては、矛盾に満ちた知性偏重の価値観を否定するものとして、受け取られたのであろう。

事実、少年たちとの歩みの中で、彼らにこのことばが最も強く響いている。人間心による価値観の社会矛盾の犠牲者である彼らにとっては、当然であったかもしれない。一人の少年は、その学びから、後に次のごとき文章を書

いている。

「今日まで、僕は、いつも、絶えず『わく』というものを意識し、『わく』にしばらく続いている自分を感じます。自分が、世間の『わく』、友人関係の『わく』、親子関係の『わく』などという、人間関係という深いいつながりの中で、いつもしばらくられ、自分の勝手な自己判断で『わく』の中の自分を見て、ある意味で、ホッとしたり、また、腹をたてたり悩んでみたりしている自分を感じます。『わく』というものが、どういうものか、自分でよくわからないのが現実です。でも、一つだけ言えることは、その『わく』という境界線をつくっているのは、周りの人たちでなく、誰でもなく、僕自身の中でつくっていたということなのです。

今までの自分をふりかえてみて、人との出あいという中で、すぐに（あー、この人は、……だ。こいつは、オレとは違う世界の奴だ。）と、相手をけん制し、そして、カコイを張る。その勝手につくったカコイの中に入る奴とは、親しくつきあい、そのカコイの外に放り投げた奴とは、うわべのオベッカつきあいしかできなかった自分を今、思います。

でも、どうあがこうとも、人である限り、人間関係の中で生きねばならない以上、僕は『わく』をもちつつけるのだろうか。特に僕が育った田舎では、たいへん、その『わく』というかなしほりを思い知らされました。その町に住む人間の生き方が決定しているように僕は、勝手に思いこんでいました。中学卒業、高校卒業、そして、上へ進むか、職につくか、そして、二十の半ばに結婚し子供が生まれ、子供を育て、村のしきたりを守り、六十をすぎ、老人会に入り、お寺参りをするようになり、そして後は、極楽参りを祈り、全く人の一生が

規定されているような気がしてなりません。そして、そのレールから外れていると勝手な価値判断でみなされた者は、徹底的に異端児扱いをうけ、そして、我こそは、ちゃんと人様に何も後ろ指をさされていないと、これまた、勝手な推測で胸をはりたがる。

しかし、みんな、どこかで、レールから外れることができない自分、レールの上からしか、物を考えることができない狭い見の自分をみようとはしない。それをみれば、自分がみじめになることも、どこかで知っているから自分を棚にあげて、他人がどうした、こうしたということにしか、目を向けず、口汚くのしるばかり、ということを自分は思います。それがたまらず、オレはオレだと強がっていました。結局はレールの上で背を向けていただけであると、人との出あいにより知らされました。

そんな時、あるお坊様が、ある場で、こう言われました。

△あなた方の生き方が、オールマイティではない。人は、それぞれの生を描き、その生をみつめるべきだ。▽と。

だから、僕は、この一年の間に、ちょっとでも“わく”をこえるというようなおこがましいことよりも、まづ“わく”にしばられた自分自身の内をみつめ、勝手な自己判断のしばられから、少しずつ脱れたいと思います。」

(『願生』一九八二、七、より)

本来、仏教とは、我々の通常の人間的エゴに基づく価値観を転換することによって、苦悩から解放するものである。特に親鸞教においては、厳しい自己凝視(内観)あるいは自己否定によって、そのような世界に至らしめるのであ

る。そして、その主体的自覚を「回心」と呼んでいるのである。

もとより、このような価値観の転換は、登校拒否に至った少年はもちろんであるが、その価値観を最も強く、少年にうえつけた両親こそ、果すべきである。むしろ、われわれとて同様である。私の出遇った少年の両親はいずれも、それを契機にその立場を学んでいる。

ところで、今の場合、登校拒否症の治療教育のために、宗教（『歎異抄』）を利用したということではない。本来、宗教とはそのような性格のものではない。宗教を利用して病気をなおすというのであれば、それ自体、迷信、邪教である。宗教とは、人間主体の確立において、人間を苦悩から解放（解脱）するものである。病気を治してほしいとのご利益を求めて、宗教を信ずるのであれば、永遠にその繋縛（意識の縛られ）から解放放たれることはない。病気へのとらわれやはからいを離れることにおいて結果的に安住の地を得るのである。真に宗教を体得すればこそ、その結果として、利益が得られるのである。それが普遍的宗教である。

したがって、今の場合も、登校拒否の少年が、真に人間主体を確立するということにおいて、結果的に、苦悩をこえ、登校拒否という精神的苦痛を克服することができたのである。あくまで、異常とか正常とか正常とかいいう視点に立つのではなく、だれでもが人間主体の確立において、真に心の自在を得ることができるとの基本的立場に基づいてのものである。

されば、次に『歎異抄』においては、いかに価値観の転換を迫るか考えてみたい。

## 五、『歎異抄』における自覚

さて、上述のごとき人間的エゴに基づく価値の転換を迫るのが『歎異抄』である。そこでの自己否定は、まことに峻烈を極めている。<sup>(9)</sup>

今、『歎異抄』の一々にそのことを確かめてみたい。そこには、日常、われわれが依って立つ価値観に対し、非常に多くの否定的側面を持った表現がある。

- (1) 「本願を信ぜんには他の善も要にあらず……」(第一条)
- (2) 「念仏よりほかに往生のみちをも存在し、また法文等をもしりたるらんと、ここにくくおぼしめておわしましてはんべらんはおおきなるあやまりなり。もししからば、南都北嶺にもゆゆしき学生たちおおく座せられてそろろうなれば……」(第二条)
- (3) 「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」(第三条)
- (4) 「聖道の慈悲というは、ものをあわれみかなしみ、はぐくむなり。しかれども、おもうがごとくたすけとぐるること、きわめてありがたし」(第四条)
- (5) 「親鸞は父母の孝養のためとて、一返にても念仏もうしたること、いまだそうらわず……」(第五条)
- (6) 「念仏を回向して父母をたすけそうらわめ。ただ自力をすてて……」(同)
- (7) 「師をそむきて、ひとにつれて念仏すれば、往生すべからざるものなりなんどいうこと不可説なり。」(第六

条)

- (8) 「如来よりたまわりたる信心」(同)
- (9) 「天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし……諸善もおよぶことなきゆえに」(第七条)
- (10) 「念仏は行者のために非行非善なり」(第八条)
- (11) 「念仏には無義をもって義とす」(第十条)
- (12) 「すこしもみずからはからいまじわらざるがゆえに、本願に相応して実報土に往生するなり」(第十一条)
- (13) 「そのほか、なにの学問かは往生の要なるべきや」(第十二条)
- (14) 「学問をむねとするは聖道門なり、難行となづく」(同)
- (15) 「持戒持律にてのみ本願を信ずべくは、われらいかでか生死をはなるべきや」(第十三条)
- (16) 「ひとえに賢善精進の相をほかにしめして、うちには虚仮をいだけるものか」(同)
- (17) 「滅罪の利益なり。いまだわれらが信ずるところにおよばず」(第十四条)
- (18) 「即身成仏……六根清浄……これみな難行上根のつとめ、観念成就のさとりなり、来生の開覚は他力浄土の宗旨、信心決定の道なるがゆえなり。……おおよそ今生においては、煩惱惡障を断ぜんこときわめてありがたきあいだ……」(第十五条)
- (19) 「断惡修善のここちか」(第十六条)
- (20) 「辺地の往生をとぐるひと、ついには地獄におつべしということ。この条いずれの証文にみえそうろうぞ

や」(第十七条)

(21) 「施入物の多少にしたがいて、大小仏になるべしということ。この条、不可説なり、不可説なり。」(第十八条)

(22) 「如来よりたまわりたる信心(信心同一)」(後序)

(23) 「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのこと、みなもつて、そらごとたわごとまことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」(後序)

このように、『歎異抄』は、そのすべてが否定的表現で綴られているといっても過言ではない。そして、そこで否定されている世界とは、世間一般、つまり、通常の価値基準に従うならばすべて「善」と認められる立場である。しかし、果して、その立場を道として、実践していくことが我々に可能であろうか。むしろ、それは、逆に我々をその否定へと導くこととなる。つまり、我々は、上述の諸問題を徳目としてかかげ、向上心をおこし、真剣に努力すればするほど、そのできない自己が逆に見えてくるのである。

たとえば、上に引用した如き種々の善根を積んで、すべてが納得した善人になることができるであろうか。また、ものをあわれみ、かなしみはぐくみ、思うがごとくたすけとぐることができるであろうか。あるいは、知的学問を第一として、真に人間性を回復して生きることができようか。我々は、それらの徳目を忠実に実践しようとするればするほど、本音とたてまえに苦しまなければならず、逆に「及び難い自己」を発見せざるを得ない。

そのことは、道徳的価値観そのものが、我々にとって、成就し難く、及び難き道であることを知らしめると同時



に、「いずれの行も及びがたき」無力さを自覚させずにはおかない。いよいよ道徳的価値観の矛盾が露わになるのである。我々が、これらの徳目の修道、つまり、人間心に基づく価値観に固執する限り、——まじめにとりくめばとりくむほど——それは自我の崩壊をもたらし、自己自身の無力さ、本音とたてまえを使いわけける偽善的な姿を暴露する以外の何物でもない。このようにして、自己を厳しく凝視することにより、この体験上の限界状況に立って、いわゆる道徳的価値観を考える時、それを否定した『歎異抄』の表現にうなづかざるを得ない。

されば、『歎異抄』において、これほどまでも厳しく、人間心に基づく価値観を否定する意図は、どこにあるのだろうか。我々をいたずらに落ちこませるだけであろうか。否、実は、これによって、人間的「我」の限界を示し、すべての自らの「力」の無効を信じさせ、ここからあらゆる価値観に縛られない世界に目覚めさせようとするところにある。それは自力に「命終」して、他力の「即生」を知らせようとするものである。されば『歎異抄』における一一の否定は、知的能力を最善とする価値観、あるいは、人間的視野で作られた善悪の価値観の否定を意味し、それらに、とらわれない「自在」なる世界の入口としての意味を持つものである。その意味で『歎異抄』の所説、すなわち、その否定性は、「いずれの行も及びがたき」自己自身の凡夫性とその「無明」を知らしめ、ここから新たに主体的世界に生かshめていく契機として、身証していくことを意味しているのである。したがって、このような『歎異抄』における「否定」の立場は、道徳的価値観の中で、本音とたてまえに苦しむ、我々を救いうるところの唯一の通路となるのである。

以上、『歎異抄』における価値観の転換を自己否定という点から見てきた。しかし、そのことは、すでに善導

(六一三〜六八一)の『観経疏』における『観無量寿経』の廃立釈と呼ばれる理解と規を一にする見解である。すなわち、親鸞における価値観の転換の論理はその源を、善導、さらにはそれを受けた法然によっているのである。ところで、このような領解の中で、親鸞は否定されるものを、単に廃捨するのではなく、解放的世界への転入における否定媒介として見ている。

つまり、「真実」に対する「相対性」に基づく価値観は、鋭く否定されるが、そこから逆に、積極的に「如来の異の方便」として、いわゆる「否定媒介」として見られるのである。人間心に基づく相対性の上に成り立つ価値観は、それ自体が矛盾をもつ否定的存在なるがゆえに、結局は、解放的世界への必然的通路となるのである。『歎異抄』における一一の否定的表現は、我々の人間的我性を「真実」に照らした表現であり、我々の行為自体が「そらごとたわごと」である限り、それは否定せられ、ただ崩壊あるのみである。しかし、逆に、それだけが、それを越えた「真実」に入る唯一の道となるのである。

かくて、登校拒否の実態と『歎異抄』による宗教的自覚について述べて来た。登校拒否児の苦しみをもつ少年と歩みをとおしてそれが心のとらわれ、繫縛によるものであることを知り得た。それゆえ、彼らもまた『歎異抄』の世界を求めたのであろう。以下、そのうちのA少年の歩みを、彼自身のことばで紹介したい。それは、まったく、私の人間性回復への学びでもあった。同時に、そこから、今日の教育の問題点もまた露わになってくるであろう。

## 六、事 例

男子。高校二年(十六才)の初めより登校を拒否。岸本博士の診断を受けた。後十七才の初めごろより、本格的に『歎異抄』を学ぶ。約一年後、本人がその経過を語った。なお、本文は、できるだけ忠実にテープを起こした。小見出しは筆者が付けた。

——ぼくは十八才になったばかりです。三重県の北部の町に住んでいます。父は会社員で、母は雑貨屋を営んでいます。

### 『歎異抄』との出会い

——『歎異抄』という本とか、親鸞の思想とかいうものはまったくわからなかったわけで、そういうものに興味を持つと思うことはまったくありませんでした。自分自身、いろいろな友人とか学校の教師とか、という関係の中で、自分というものが、どういうものかそういうざわざわした人間味のない関係の中で、自分というものを見失っていました。——十六才のころですが——そして、それからというものは、見る人だれもが信用できなくなった。みんなやっぱり、自分のことを白い目でしかみないのではないかという勝手な想像ばかりしてなかなか人と会えませんでした。というのは、人と話をしたりするのが、ものすごく不安でおそろしかったのです。そういう時期が長く続きまして、自分が自分でどうなのかとか、これから先、長い人生どのようにして生きるのか、ということを考えてた時、自分の目の前にあったことばは絶望ということばだけしかありませんでした。

その時に、私の家の近くのお寺の人のご紹介で、名古屋の岸本鎌一先生という、本当の人とか真実の人とか、そういう立派な人にあわせていただく縁がありました。それが、まず『歎異抄』との出会いでした。

自分で読もうとか、自分で本屋さんから買ってこようというのでは、まったくなくて、そういう真実の人、つまり、今まで信じられなかった大人たちの中で、ぼくが始めて信じられた人——名古屋の岸本先生とか高史明先生とかそういうった先生がた——のありがたいお手紙とか、お話で『歎異抄』を読んでみなさいということで『歎異抄』というものを最初に目にしたわけです。

### 荒れた生活

——当時のぼく的生活は、まず一言でいえば、夜と昼がまったく逆転した生活でした。起きるのは夕方ごろ、やっと寝るのが朝方という状態でした。

一番つらかったのは、真夏の暑い日なんかです。ものすごく太陽の日ざしがきつくて、暑い。その中でも人と会ったり、外に飛び出して行くということができず、今から思うとバカみたいだが、ま夏の暑いカンカンでりの日の午後二時三時ごろふとんの中で汗をだらだらかいて寝ていました。それでもふとんをもっこりかぶってねていたのです。

夕方起きるのですが、起きている間は人とものをしゃべりたくなかった。両親としゃべるのもおっくうで、たまにしゃべれば、もう口ゲンカや言い合いで、時には暴力もふるい、家庭の中はめっちゃくちゃでした。

妹が一人いるのですが、妹はいつもぼくが起き出して来て、父や母と言いたいと自分の部屋へ何もいわず、すぐひっこんでしまいました。ひっこんでしまうというより、ひっこんでしまわなあかんと、自分でも感じるようになったのか、すぐそうして、家の中はいつも暗い雰囲気でした。

## 単車との出会い

——それから、そういう時期が少し続いた。そして、世間の人のうわさとか、無責任なことなどがビシビシあるものだから、何というのか、人が言っていないようなことまで、言っているのではないかという想像や、ちょっと人の顔を見れば、この人こう思っているのではないだろうか。とあれこれ考えた。そのころは、もう高校は途中でやめてましたので学校は行っていなかった。だから、みんなが学校へ行っている昼間などに人に会うと、やっぱり「どうしたのか」といわれ、そのたびごとにどうしても自分ではみじめになった。

そういう中で、だんだんうわさがうわさを呼び、広がって行って、もうほとんどの人が

「あその子はこのごろちょっとおかしい」

「学校へ行く日なのに学校へ行っていない」とか、

「毎日、何をしているのだろう」

といううわさが広がり出して、これでは人に本当に人間として、あるいはそういう目で見てもらえない。と思う反面「そうじゃない、そうじゃない」という自己主張、つまり、自分ではみんながいうような自分ではないんだと、ひとり反発していた。

その反発をもっとちがった方向で見出せばよかったと今では思うのですが、学校もやめていたのでその手段を自分でも考えつくほどの余裕がなかった。

そこで一番手近なものといえば、単車というか、今あるつっぱりというものだった。

そこで、まあ「そうじゃない、そうじゃない」「みんなが言っているようなふぬけな男ではないんだ。」そればかりで「そうじゃないぞ、そうじゃないぞ」と人にばかり見せようとした。

それからというものは、夜昼かまわず単車を乗りまわし、そのうち一人、二人、三人、四人とだんだんグループが出来てきて、グループで夜の村の中、町の中とあたりかまわずそこらじゅう乗りまわし、だんだん落ちて行く一方であった。

### 高史明先生からの手紙

——やっぱり、単車に乗って頭をリーゼントにして、突攻服のような人と違った服装をして町の中を歩き回った。

考えてみると、ほんの一年の間にまったくタイプの違う二通りの十六才になった。

初めの十六才はきっちり和学生帽をかぶって電車で、学校へ通う優等生とまでは行かないが、普通の高校生だった。

その次は、前に言ったように、つっぱりの十六才だった。

たった一年の間にまったくタイプの違う二つの自分を自分で作りあげてしまった。しかし、どちらも続きませんでした。単車に乗って人をおどし、ドスを聞かし、にらみを利かして「お前たちの言うようなものと違うのだぞ」ということ、そればかりを誇示していたぼくなんです。が、どうしても自分というものの解決がぜんぜんつかずに、どんどんわからなくなるだけでした。そして、つっぱりはますますエスカレートして行くだけでした。

よくその時、人はそんなことでなく、他へそのエネルギーを発散したらどうかといわれたけれど、もう学校をやめた時点で、ぼくは勉強なんか捨てた、というか放っていた。いろんなことがあったけど、勉強って何やと思っていた。——どこかでたった一つ信じられるものを見つけようとしたのだけれど——。

学生帽をかぶって、学生服をきて、まじめに学校へ通っていた折も、そして、頭をリーゼントにして、そういう人とちょっと変わったかっこうをしても、どこかでぼくは同じものを求めている。

「一つ信じられるものをほしい。」

「こいつだけはだれが何といおうと信じられるんや」

というものを、ぼくは欲しかった。これは、ぼくだけでなく、ぼくの友だちもみんなが求めている。日常のざわざわした世の中で、いったい何が信じられるんやという、この世の中で何か一つだけでいいから、自分が絶対に「これは真実だ」と言えるもの、それをみんなが求めていると思うし、ぼくもやっぱりそうやって世間に背中をむけて、へたにつっぱっていただけ、その中でぼくが求めるものはしだいしだいに大きくなっていった。

しかし、それでも、なかなかみつからなかった。もがいて、もがいて、お先まっ暗というか、このままでは、人には笑われる。人にはばかにされる。そんなんだから、仕事にはつけない。つけないというより、その時、仕事なんか行く気さえなかった。まったく、その世間から言えば、一人の本当に墮落した、ダメな少年というわけですけれど、その時、高先生という人を思い出した。

ぼくの家のすぐ近くに行順寺というお寺があります。ぼくが中学三年の時、そのお寺に高先生が講演にみえた。

その時、ぼくは、普通の中学三年生だった。でも普通の中学三年というのがいったいどういう中学三年かという事は、わからないと今思う。まあ、それはいいけど、普通というより、世間という普通の中学生で、あまり問題のない時だった。

その時、高先生がお寺に見えてた。その時は、お寺なんか、年寄りばかりの集まるところだと思っていたので、行くのがいやだったんですけど、父親がむりに引っぱって行って、むりやり、しびれをきらして聞いていた。

その時、そのお話は、むつかしくて、あまり、よくわからなかったんですけど、一つだけ、今でも憶えていることがあるのです。

それは、

「自殺をしようと頭が考えた時、心が思った時、その時は手の平をみなさい。心は、あるいは、頭は死のうと考えたけど、きょう口の中にごはんをはこんでくれた手は、死ぬといっているのか。それでわからなければ足の裏を見なさい」

そのことば、だけしかわからなかったのです。そして、そのことは、ずうっと忘れていました。

しかし、高校二年の時、何か一つ真実のものを見つけたいと思った時、ふっとその「手の平を見なさい」という高先生のことばというのが、夜中の二時ごろ、思い出された。——考えこんでいる時でした。

そのことばだけは、ほっておけなかった。あの東京からみえた、あの立派な先生が「手のひらをみなさい」と言われた。——どういふことだろう。自分では、全然解決がつかなかった。そして、思いきって、ぼくのことをわか



ってもらおうと思って、今までぼくがどのようにして来たか、そして、今ぼくがどのような生活を送っているかということすべてを高先生に知ってもらおう、一から十まで知ってもらおうと思って、手紙を書いてみた。便箋がちようどなかったので、普通の大学ノートに鉛筆で、六、七枚書いて、お寺で住所を聞いて出した。

そのお手紙に高先生が、ご返事をくださった。それに、とても心を打たれた。その中に、今、ぼくの回りをとりまいている大人の人が言うようなことは、一つも書いてなかった。

「よくお手紙を書いてくれた。本当によく書いてくれた。」

ということばが、ぼくの胸を打ちました。そして、これほどアカの他人のぼくのいうことを深くとらえてくれる人になって、そのたびに、ありがたい、本当に深いご返事をいただいた。その中に

「始めはわからないかもしれないけど『歎異抄』を読んでみなさい」

と、名古屋の岸本先生と同じことが、いわれていました。それで、『歎異抄』という本を手にしたのです。

### 自分にとってつっぱりとは

——つっぱりとは、ぼくのすべてです。つっぱりを取ったらぼくがぼくでなくなる。学校もやめて、勉強や学歴では通用しない。それやったら手に職をつけよといわれるかもしれない。けど、それほど気の回るぼくではなかった。一番、手とり早く人の上に立つものといえ、それはつっぱりしかなかった。その当時というのは、リーゼントをして、特攻服をきて、なんかそういう自分が、すべてで、今の自分かもし変ってしまっ、普通の者になったら、

もうぼくは、自分を取りまいている友だちの中から消えてしまおう。

### つっぱり空しや

——つっぱりがすべてで、これを取ったらぼくがぼくでなくなる。それはずっと思っていたことやし、それがなぜという——。

今でもまだつっぱっている。外見上は、さほどのつっぱりはないけど、心というか、ぼくの内部で、人を見れば、なんだあんなやつとか、なんだこんなやつという、そのつっぱりがあるから、すべてつっぱりがとれたとはいえんけど、前ほどのものが少しやわらいだ。なぜやわらいだかという、人との出会いというか、縁というものを通してなんやけど、それによって、空しさが見えて来たのです。

「こいつはツレ（友だち）や」、「オレたちはツレや」と言っておきながら、みんながみんな牽制のしあいであり、みんなが上でありたいと思っている。小さいところでワァワァ言いながらお山の大将をきどっているだけだった。眉毛一つ剃るということにしたって、それでどうやといっても、そのことで立派な人間になれるというのなら今からでも剃るけれど——。やっぱり、その眉毛を剃るという事で友だちを牽制するということだし、眉毛を剃って、友だちに、「どうや」といってもそれだけで、友だちと一歩も二歩も離れていく。

現在、つっぱっている子はたくさんいると思うけど、それでもつツレや、厚い友情だと思っている人が大部分やと思うけど、自分一人になって「友だちってなんや」ってふりかえって、みつめた時、空しくなってくる。

やっぱり、もっと深いところで深い目で自分を含めて、自分をとりまいている友だちをみてみた時、たださわい

で、その場の時間さえ楽しくすぎて行けばよいと考えて、そのさわぐグループをただ友だちと呼んでいただけにすぎなかった。それは、友だちでも何でもなくて、ただの集まりと、今は思う。

### イメージという殻

——つっぱたりして、長いこといたから、まわりの大人たちにも、友だちにも、みんな、ああ、あの子はあんな子やというイメージのようなものがもすごく定着していた。だから、今度、自分が自分で作ったイメージとか服というか——よけいな服なんやけど——それを脱ぐということは、着るよりもずっとつらいことでした。回り的人にも、ああ、あの子は学校やめて、バカなことをやっているあんな子やなというイメージが植えつけられているし、もちろん、自分の中にも、一番植えつけられていて、人がどうこう言うより、自分がそういうことを思っていた。

ポウフラのように——ポウフラってよく言われたことばなんだけど——毎日、毎日、何するでもなく、単車で飛び回ってみたり、後は家で、ゴロゴロ寝ていたりして、何にもならない生活を送っていた。

「あんなやつはポウフラじゃ。」

「あんなものは……」

と、いろんなことを言われて来た。言われるたびに、

「何、お前たちの言うようなもんじゃないぞ」

「そうじゃないぞ、そうじゃないぞ」

と、反発して、エスカレーターし、どんどん単車を乗り回した。そうやって言う人の回りをよけいに乗り回した。徹底的に、それにたち向かおうとした。しかし、世間のうわさというヤツにたち向かおうとすれば、するほど向うのヤリはどんどん自分の中に突き刺さって来たことは事実でした。

『歎異抄』を学び始める

——岸本先生や高先生という立派な人がいわれる『歎異抄』という本を買うのは買ったけど、いざ本を開いてみて、何やら一章、二章とあって、一応、自分でも目をとおしたのだけれども、深い意味も、何もわかりませんし、原文を読んでも全然わかりませんでした。第三条になって来ると、善人でも救われるのだから、悪人が救われないはずがないなんて、ことばがひっくりかえってへんのかな。これを書いた人はまちがえたのかなあ。というぐらいしかとらえられなかった。それに、その時、かなり自分をごまかそう、ごまかそうとそれにせいっぱいでした。不安があったのです。こいつに真剣にとり組んだら、おれが今こままで作りあげてきた虚像が壊されるじゃないか。

この一冊の本によって、ごまかしている自分が——その時は自分をごまかしているということがわからなかったが——こわされるのではないかとという不安と恐れがすごくありました。だから、上面だけ、目先だけでしかとらえようとしませんでした。それぐらいしかよう読まなかったのです。

そうやって、本を買うのは買ったけど、まったく意味もわかりませんでしたので、放り出してしまっていました。七ヶ月ぐらいたって、その本がどこへ行ったかもわからなくなったところに、ぼくの近くのお寺の人からさそわれて、『歎異抄』を読むことにしました。

週三日ぐらいつつ、一日、二時間から長い時は、三時間ぐらいかけて、いろいろ一所懸命教えてもらいました。そして、私の話もいっしょうけんめい聞いてくださいました。

あるときは、友だちと牽制しあっていることの苦しきについて、ある時は、つっぱり、虚勢をはっていることの苦しきなどについて、真剣に考えてくださいました。そこで、教えられ、気づかされたことは、そのつっぱりが、かえって自分を縛り苦しめるんだということでした。

また、ある時は「世間のうわべだけの世界のワクにおったらあかん、一度そのワクから飛び出してみたらどうや」と、そういうことをものすごく深く、熱心に教えていただいて自分一人で読んでいる時とは、まるで比べものにならないくらい深い教えにであいました。

しかし、また、そのころから自分で、いろいろごまかそうごまかそうとそればかりで、懸命であったから、お寺から帰れば単車を乗り回して、ふざけた友だちと、そこらで、たむろして遊んでいました。その遊びというのも、その当時は、だんだんエスカレートしてきて手のつけられないような遊びでした。そしていろいろ悪い遊びにも走っていました。

しかし、そのころ、お寺の人は、ぼくがそういう悪い遊びをしているということを知っておられたようだけ一度も、それを「やめろ」とはいわれなかった。ぼくは、その時、実に不思議な気がした。周囲の大人たちはみんな「やめろ、やめろ」「ダメだ」というのにこの人は何も言わないので不思議な気がしました。

当時のぼくは、世間の大人たちからは、非行少年、中ば不良と思われていました。友だちの家へ遊びに行っても、その両親からはいつも追いつ返されました。

時には

「お前が来るとうちの子供までが登校拒否になるから帰ってくれ」

といわれ、足で砂をかけられたこともありました。しかし、お寺の人はそんなぼくのことを真剣に考えてくれました。ますます、その人がわからなくなって来ました。

迷い

——それから一ヶ月ぐらい過ぎました。しかし、このまま、このお寺で『歎異抄』という本を教えてもらっていたら、オレがオレでなくなってしまうのではないか。せっかくここまで作りあげてきたオレというつっぱり地位とどうか、ハクとどうか、なんとどうか、そういうものが崩されてしまうのではないかと、恐れと不安をこのころから感じ始めました。「やばい」、このまま『歎異抄』を読んでいるとやばい。それは、この『歎異抄』には、オレぐらいものとせず、ころっと変えてしまう力とどうか、そういう不思議な力があるということを、ようやく、うすうす感じはじめて来たということと、それから、もう一つは『歎異抄』をほかに教えてくれる熱心さというか、広い心というか、その人のもつ強力な力。その二つをまのあたりに見て、聞いて、このまま続けられれば、ぼくがせっかくここまで作りあげて来た自分というものが崩れさるよう思えてきました。今、ここで、つっぱりを取ってしまえば、もう今度はだれもオレの事を見向きもせんやろということがものすごくわかっていたから……。

そのころ、人がぼくを見るのは、りっぱな仕事をやっているわけではないし、頭がいいからでもありません。い学校へ行っているからでもありません。ただ、つっぱって「この辺の若い者とは違うぞ」「あそこの子はちょっと変っているぞ」そんな目で見られていた。でも、そういう目でもいいから、人から見てもらいたい。人からそう見てもらうのは「あんなやつおったんけ」と言われるよりは、ましやから……。どこかで、いつも自分の存在感というものを自分で感じていたから……。

この『歎異抄』というものをこれから教えてもらおうと、どんどん自分は『歎異抄』、つまり、浄土真宗という教えの中に引きずり込まれて、自分が自分でなくなるのではないかと思いはじめました。その不安と恐れのようなものが日に日にますますつのつて来ました。これより以前は、家に帰ってきてからも『歎異抄』を開けていたのに、そのころは、お寺から家へ帰れば、マンガの本と同じで、そこらにボンとほり投げていたという時期がしばらく続きました。

こんなことをして『歎異抄』を読んでいったいどうなるのか。こんなことが村の人たちに通用するのか、とこんなことばかり思い始めました。こんなことをやっていて本当に大丈夫なのか。ひとつの理想やないか。この『歎異抄』の中に書いてあるようなことをしておっても、この荒々しい世の中、荒れた冷たい世間を渡り切ることができるとか。

そんなことは、世間のルールからころげ落ちたやつということや。みじめなやつという吠えことにしか過ぎんやないかということや、人にも言われ、自分でもそう感じました。

そして、次第にぼくがお寺へ通っているということが友だちにも世間にもバレてきました。その友だちというのは、単車をいっしょに乗り回している友だちです。

「お寺へ行くのみたい年寄りにまかしておけばいいやないか。オレらは、オレらの年のことをしやいいのや。

そんな寝ぼけたじじいのようなことを言うとするな」

と、回りの友だちから言われました。

そういううわさも広まり、そんなことも言われるし、自分でもどうしていいのかわからなかった。ぼくに願いをかけてここまで導いてくれたお寺の人たち、そして、高先生、岸本先生……そういう人を捨てて、そういういいかげんなことを言う友だちの世界にもどって単車を乗り回すのか、ということでも真剣にいろいろ悩みました。なかなかぬけ出せず、悩んだ日がしばらく続きました。

### 真宗寺の友だち

——そうやって、『歎異抄』を学び始めて六ヶ月ぐらいたち、中途半端で「ああ……」という感じで聞いとって、どうしたらいいんやろ、このまま『歎異抄』を聞いてこの人についてやとっていいのか。それか友だちの言うようにそんなことじじいにまかせておいたらいいのだろうかということやいろいろなことがふりかかってきて、人の言うことが何やらわけがわからなくなって来た時に、お寺の人に九州の熊本の真宗寺へつれて行ってもらいました。

そこで、ぼくはまのあたりに一つの姿を見せつけられた。それは、今までの自分の回りをとり囲んでいた友だちというのは、剃り込みを入れて眉毛を剃って、リーゼントにして「世間なんていうのに、合せていたらやりたい事、



やれへん、若いうちや、やりたいことやって、年寄りになったら何もできへん。嫁もろたら何もできへんや、若いうちにやりたいことやらな終りや」といって、いいかげんにふらふらしている連中であつたし、ぼく自身、そうであつたわけです。もちろん、十六、七才の子というのはみんなそうなんやなあと思つていました。

それが、その熊本のお寺へ行ったら、ぼくとけっこう年の変わらない十八から二十いくつの子たちが、いっしょうけんめい『歎異抄』、親鸞聖人の教えを聞き、浄土真宗の教えを学び、自分の生き方について、熱心に考えていました。それでいて、その人たちを見ても何もかた苦しなく、ものすごく自由でのびのびして底ぬけに明るいい人たちがかりでした。何か、それまでのぼくは『歎異抄』とか『教行信証』を読んで、親鸞聖人の教えをやっている人はかた苦しい人で、あまりオダッタ（ふざけるの意）ことなどしないんだろなあと思つていたのだけど、いざ、熊本のそのお寺へ行ったらいっしょうけんめいやっておられ、そして、そうかと言えば、夜、少し酒を飲んだ時は、ものすごく底ぬけに明るいい人たちがかりで、まったく自分の中の世界がひとつひっくりかえつたそういうものを感じました。

そのお寺に、仏教青年会というのがあつて、また、そのお寺の中で住職さんや奥さんたちといっしょに寝食をともししている若い子たちがおりました。その人たちは、ものすごい過去を持ち、人生のいがさをなめて来た人たちがかりでした。いっしょうけんめい生きることとは何やとか、いったいオレは何や、それを自分の死をもつて見つけようとした、そんな子もいたし、いろいろそういう過去の傷というか——その傷は、世間のちよつとした傷ではなくて、生きる死ぬという人間にとって一番の傷をおつてきた子たちがかりで、そういう子たちと夜遅くまで

話し合える機会が持てて忘れられない出来事になりました。

今までのぼくは、お前たちの言うことは「ちがうぞちがうぞ」と世間に反発して来ました。おまえらの言うことみたいおかしいじゃないか。偽善者ぶって、いいかげんなこと言うとするな。理由も知らないのに勝手な無責任なことを言うとするなと、世間に吠えつづけてきたオレが真宗寺の友だちから「世間のみんなが言うとするのがすべてではない、自分は自分の生き方をすればそれでいいじゃないか」と言われた時、本当に打ちくだかれた。

今まで、いこじになって、肩をはって單車を乗り回し、人目を気にしながら、リーゼントにし、眉毛を剃って人を脅し、ドスをきかしていた自分が、いかにもこっけいで、みじめなものでいったい何をやっとなのやと、いう気になりました。自分を振り返ってみたらもう、その子のことばに打ちくだかれたような感じがありました。熊本では、今まで「善いこと」と思っていた考え方がぶちこわされたという感じでした。

### 自分が崩れる

——帰って来てからまだいろいろな友だちがいる。單車友だちというか、そういう友だちがいるので、電話もかかってくるし、さそいもありました。土曜日の夜なんか「きょうはどこどこへ行くぞ」と言って、さそいに来るけどもうあかなんだ。今まで、音楽に酔い、酒に酔い、タバコに酔い、あげくの果てはシンナーにまで酔っていたオレが前と同じ所で、同じそうぞうしい音楽を聞きながら、同じようにおけるのやけど、もうオレの中では、その時は、真宗寺の人たちの姿が浮かんできました。今まで、そんなことは、ありませんでした。喫茶店や、そんなところにいる時、きょうは何するか、きょうはどこどここのやつがえらそうやでどうするか、どこどこにかわいい子がおると

か、そんなことばかりしか考えておらなんだオレが、同じ所におってももうダメでした。あの真宗寺の人たち、あんなに苦しい傷をおった子、血まみれになって、そのお寺までたどりついた子を、あんなに明るく本当の人間のよりに、広い人間のように変えたのは何んや。あんな深い、苦しい傷を負うて、打ちのめされた子が、あんなに明るくのびのびとした真実の人間にならしたのは何か。親鸞聖人の教えとは何か。そういうことしか考えないようになりました。

前と同じように単車に乗って遊んでいる時、同じように単車で十二時、一時のま夜中にワアワアと走っている最中でも、今ごろ真宗寺のみんなはどうしているのかなあ、と、そんなことを考えるようになって、次第、次第に、自分の中でガラガラと何かしらん崩れていくものがわかった。

それから、今度は、朝、お寺へ通い、朝のおつとめをして、引き続き、『歎異抄』について、お寺の人にいろいろ深く教えていただきました。ぼく自身どんどん引かれて行きました。いったい、これはどういうことか。本当に打ちのめされていた時に、つまり世間の大人も友だちも親も、だれもが信じられなんだ時だけにぼく自身、真剣になれました。(以下略)

(一九八二・三・二四)

その後、この少年は自ら決意して、大谷専修学院に学んだ。そしてそこを終え、今は働きながら通信制高校で学んでいる。

## 七、むすび

以上、教化学、実践仏教学としての立場から、登校拒否の問題へ取り組み、レポートという形で述べてきた。

それはすでに、岸本鎌一博士や作家の高史明氏が提唱するところを私なりに、宗教者としての立場でかかわったにすぎない。

A少年との長い歩みは、むしろ私の歩みでもあった。同時に、仏教というものが、現代のあらゆる問題に答えることを改めて感じた。

現在、私は新たにB少年（十五才）と同じ歩みをしている。しかし、このB少年の最大の理解者はA少年である。なお、今回は、事例が一面からだけのものに留まったが、両親や学校などの方向からも見なければならぬ。機会があれば、それらを含めたトータルな立場から考えてみたい。不備は今後の課題とする。

## 註

- (1) 池田勇諦「真宗化学の原理」(『同朋大学論叢』第四四・四五合併号)五二頁
- (2) 平井信義他著『登校拒否の治療教育』(一九八一 東京書籍刊)一〇頁
- (3) 『同』二三頁
- (4) 岸本鎌一著『人間回復の道——仏教と精神医学』(一九八四 弥生書房刊)一〇七頁
- (5) 『同』一〇七頁
- (6) 『同』一〇八頁
- (7) 『定本親鸞聖人全集』四、言行篇一三八頁
- (8) 『同』三八頁
- (9) 拙稿「親鸞における否定的側面と方便——『歎異抄』を発端として——」(『同朋学園仏教文化研究所研究紀要』第四号、一九八二年)参照